〒060—8711 札幌市中央区大通西3丁目
TEL011・241・1230（代表）©北海道新聞社
道新スポーツ
2015年（平成27年）
昭和57年9月4日 第三種郵便物認可
4/23 木曜日 第11629号 10版
〈日刊〉提携 サンケイスポーツ

夢へトライ ① 北海道バーバリアンズ

北の大地で闘うフィフティーン

留学生の加入で激変

クラブチームから勝負意識した集団へ

2019年にはラグビーW杯が日本で開催され、札幌ドームも会場の一つになるが、道内のラグビー人気はいまひとつ盛り上がりに欠けている。そんな中で40年にわたりラグビーチームを運営し普及にも力を注ぎ、現在では日本屈指のクラブになった北海道バーバリアンズ。ラグビーを愛した男たちの熱き挑戦を紹介する。

当時5人で結成

1975年（昭和50年）の春、樽潮陵高のOB5人が高校の授業で体験したラグビーが面白かったという単純な理由でチームを結成した。チーム名は「ボーミッツ（吐くという意味の英語）」。特に運動をしていなかった連中だけに、日曜の朝の練習で走ると吐いてしまうことが多かったことからつけた名だ。

全国トップクラスの実力を誇る北海道バーバリアンズ（円内は田尻さん）

創始メンバーの1人で現在バーバリアンズの代表・クラブキャプテンを務める田尻稲雄さん（66）は「練習した後に皆で飲みに行くのが楽しみで、そのためにやっていたようなもので」と当時を思い出して笑う。大会に出ても、勝ち負けはさほど気にかけず楽しくラグビーができればそれでいい。

そんなどこにでもあるクラブチームが劇的に変化を遂げるきっかけが、83年に加入したある一人の選手だった。現在はニュージーランドで翻訳業をしているマーク・イーリさん（58）。当時は北大に留学しており、ボーミッツの選手とトレーニングジムで知り合ってチームに加わった。

ラグビーの本場で子供の頃からプレーしていたマークさん。周りの選手がまず驚いたのは勝負に対する執着。「やるからには勝たなければ意味がない」。勝つためのトレーニングをしっかりすることを周りの選手にも義務づけ、練習方法から試合に臨む心構えなど本場のラグビーをクラブのメンバーに叩き込んだ。

それまでは人数が増えてもチームは一つだけだったが、年代や実力によって複数のチームを編成し、より試合に出る機会を増やして選手のモチベーションを高めた。そんな中でチームは徐々に力を付けていった。

'19ラグビーW杯日本開催！札幌ドームでも

〒060—8711 札幌市中央区大通西3丁目
TEL011・241・1230（代表）©北海道新聞社
道新スポーツ
2015年（平成27年）
昭和57年9月4日 第三種郵便物認可
4/24 金曜日 第11630号 10版
〈日刊〉提携 サンケイスポーツ

夢へトライ ② 北海道バーバリアンズ

北の大地で闘うフィフティーン

欧米型地域密着クラブへ

本場との交流が契機に

NPO法人化すっかりボーミッツに入れ込んだマークさんは、本場から来た留学生や語学学校で働いているラグビー経験者を次々と勧誘。面倒見も良く、アパートや仕事の世話までしたというから外国人選手が増えるのは当然だ。本場さながらのシステムでラグビーに取り組んでいることが知れ渡るにつれ、日本人のラグビー経験者も加わり、徐々に力をつけていった。

1987年（昭和62年）、チームの仲間が第1回ワールドカップを観戦に行くことになった。田尻キャプテンによると「ニュージーランドに行くことになったとき、名前を聞かれてボーミッツ（英語で嘔吐という意味）じゃまずいんじゃないか」いうことになった。そこで付けたチーム名が現在の北海道バーバリアンズ。本来「野蛮人」という意味で、ラグビー界では一流の選手を集めて特別に結成されるチーム名としても使われる。

そのバーバリアンズが93年には全道選手権Aブロックで初優勝。とうとう、北海道の頂点に立った。しかし、それで満足するわけにはいかない。「本場のスポーツクラブとの交流を通じて、その運営の素晴らしさに驚いた。誰でも参加できる欧米型のクラブが日本にあったらという気持ちが強くなった」と田尻キャプテンの心に火が付いた。

外国人選手が増えるにつれ、日本人選手のレベルも上がり、チーム力アップにつながった＝1996年、全道選手権Aブロック決勝

高い実力を持ち、なおかつ地域と深く結びついたスポーツクラブへの思いが強くなった99年、スポーツクラブとしては日本で初めてNPO（特定非営利活動）法人認証を受けた。法人名は「北海道バーバリアンズラグビーアンドスポーツクラブ」。ラグビーだけではなくスポーツ全般との関わりを見越したネーミングで、夢の実現に大きな一歩を踏み出した。

'19ラグビーW杯日本開催！札幌ドームでも

〒060—8711 札幌市中央区大通西3丁目
TEL011・241・1230（代表）©北海道新聞社
道新スポーツ
2015年（平成27年）
昭和57年9月4日 第三種郵便物認可
4/25 土曜日 第11631号 10版
〈日刊〉提携 サンケイスポーツ

夢へトライ ③ 北海道バーバリアンズ

北の大地で闘うフィフティーン

専用グラウンドが成長後押し

14年全日本クラブ選手権初V

屈指の強豪にNPOになったことで本格的なスポークラブを目指す目標がより明確になり、それまで以上に真剣に楽しくラグビーに取り組む意識がクラブメンバーの中にも浸透していった。チームはいっそう力をつけ、2002年には全日本クラブ選手権で決勝に進出、惜しくも名門・タマリバクラブに敗れたが、全国の強豪の仲間入りを果たした。

ここまでくると次にどうしても必要なものがあった。それはグラウンドとクラブハウスだ。「いつでも自由に練習できて、練習した後は一杯飲んだり仲間同士でくつろげる場所があれば理想的」と田尻キャプテンを中心にクラブメンバーたちがずっと夢に描いていたものだ。

グラウンドやクラブハウスを手に入れるためには資金が問題になる。田尻キャプテンが1999年にそれまで経営に携わっていた医薬品の卸売会社から独立し医薬品流通ビジネスを立ち上げて成功。その会社から融資を受け、毎年のクラブ費から返済する形でクリアできた。

その夢が実現するときがくる。07年2月、NTTが定山渓（札幌市南区）に所有していた約1万800坪の広さの施設を譲り受け、グラウンド2面にクラブハウスなどを備えた自分たちの城ができた。「目指していた総合型地域スポーツクラブの第一歩でした」。環境が整ったことでチームはさらに力をつける。10年に東日本トップクラブリーグを初制覇。さらに14年3月、全日本クラブ選手権の決勝で名古屋クラブを破り念願の初優勝を成し遂げクラブラグビー界では屈指の強豪に成長した。

定山渓のグラウンドで汗を流すバーバリアンズ

'19ラグビーW杯日本開催！札幌ドームでも

〒060—8711 札幌市中央区大通西3丁目
TEL011・241・1230（代表）©北海道新聞社
道新スポーツ
2015年（平成27年）
4／28 火曜日 第11634号 8版
昭和57年9月4日 第三種郵便物認可
〈日刊〉提携 サンケイスポーツ

④ 夢へトライ 北海道バーバリアンズ

北の大地で闘うフィフティーン

定山渓が7人制で脚光

専用Gを活用

現在チームには創立時から参加している還暦を過ぎた選手らの40歳以上、40歳以下、U―19、高校生、中学生、小学生、幼児、女子とそれぞれのカテゴリーで300人以上が所属してラグビーを楽しんでいる。施設もグラウンドとクラブハウスに加え、専用ジムに屋内練習場も完成し一層充実してきた。

クラブ会費や寄付でまかなう年間の予算も1000万円を超える規模になったが、施設の維持には通常かなりの費用が必要だ。できるだけクラブ員たちの労力奉仕で賄う方針で、たとえば芝生のグラウンド2面の手入れは、雑草取りから水まきなど全てクラブ員が行うため、業者に依頼するときの3分の1以下、わずか300万円で済んでいる。

自分たちのグラウンドやクラブハウスができたことでクラブ員たちの意識も変わってきた。「クラブ会費を滞納する連中が多かったんですが、グラウンドを持ってからは、お金がかかるのが分かっているので、みんな払いが良くなった」と田尻キャプテンは笑う。

施設が充実すれば次はそれを利用してラグビー普及のイベント開催だ。2012年から釜石シーウエーブス、タマリバなど全国の強豪を呼んでセブンス大会を開催した。記念すべき第1回大会では7人制の日本代表でバーバリアンズに所属しているトゥキリも元気に参加した。昨年から7人制女子日本代表の合宿を誘致、今季は女子代表に加え7人制男子日本代表の合宿も予定されている。全国から注目される存在となった定山渓グラウンドは、まさにラグビーのメッカといっていい存在になった。

全国大会や日本代表合宿開催

7人制日本代表に選ばれている北海道バーバリアンズのトゥキリ（中央）

'19ラグビーW杯日本開催！札幌ドームでも

〒060—8711 札幌市中央区大通西3丁目
TEL011・241・1230（代表）©北海道新聞社
道新スポーツ
2015年（平成27年）
4／29 水曜日 第11635号 10版
昭和57年9月4日 第三種郵便物認可
〈日刊〉提携 サンケイスポーツ

⑤ 夢へトライ 北海道バーバリアンズ

北の大地で闘うフィフティーン

女子や他競技に拡大

NZに留学も

ラグビーが正式種目になるリオ五輪、ラグビーW杯日本大会を見越して「これからの10年」の活動計画を2009年に立てた。その中には一層の施設の充実や、地元・定山渓の活性化を企画するなどとともに「地域に根差した生涯スポーツクラブ確立」が掲げられている。

7人制が正式種目になっている来年のリオ五輪に向けては、日本ラグビー協会から「7人制・女子強化推進」に向けて地域で普及・強化に協力する「パートナークラブ」に認定された。選手の発掘・強化の一環として札幌ニュージーランド協会と協力、交換留学生制度を創設した。3月には第1期生として道内の女子高生3人を派遣、オークランド州のラグビーアカデミーでトレーニングとスキルを学びながら語学の研修を4週間受けた。

資金増のため認定NPO申請へ

地域型スポーツクラブの確立のために携わるのはラグビーだけではない。定山渓グラウンドの敷地内にクロスカントリースキー、パークゴルフのコースを設けている。アイスホッケーにも力が入っており、11年に立ち上げた少年チームに高校生、今年からシニアのチームも加わった。

活動が広がるにつれ資金も必要になる。現在は年間予算のうち会費が4割、残りが企業、個人スポンサーからの寄付など。収入を増やすには寄付が重要な要素になるが、田尻キャプテンは「寄付金が所得控除の対象になり、より寄付がしやすい認定NPOの申請を今年中にしたい」と、次なる策を練っている。より高い公益性が求められる認定NPOだが、条件は十分クリアしている。資金をしっかり確保して、さらなるスポーツ振興のために突き進む男たちの情熱はまだまだ冷めない。

＝おわり

※この連載は宗像哲也が担当しました

真剣にボールを追うバーバリアンズの女子選手ら

懸命の守備をするバーバリアンズ少年アイスホッケーチーム

'19ラグビーW杯日本開催！札幌ドームでも